

科学研究費補助金（基盤研究（S））研究進捗評価

課題番号	20220005	研究期間	平成20年度～平成24年度
研究課題名	言語の脳機能に基づく手話の獲得メカニズムの解明	研究代表者 (所属・職) (平成26年3月現在)	酒井 邦嘉（東京大学・大学院総合文化研究科・教授）

【平成23年度 研究進捗評価結果】

評価	評価基準
A+	当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
○	A 当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
	B 当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
	C 当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である
(意見等)	
<p>本研究は、従来の「Broca の運動言語野と Wernicke の感覚言語野」という言語地図に代えて、言語の基本要素である「文法・文章理解、単語、音韻」という機能分化を言語野の機能分化に対応させた新しい概念を提唱し、ヒトの脳腫瘍患者の言語能力と脳イメージング研究、及び、ろう（聾）者の手話教育の実践と fMRI 研究を通じて、それを実証しようとする意欲的な研究であり、幾つかの重要な進展があり研究は概ね順調である。</p> <p>例えば、倫理的に介入が不可能なヒトの言語獲得・発達の研究モデルとして、ろう児の手話獲得メカニズムの解明を導入したアイデアは素晴らしく、それによって得られた成果を手話教育に取り入れて、より効果的な学習法を開発するなど、研究と実践が適切に連動して居る。聾教育の現場との連携も密である。</p>	

【平成26年度 検証結果】

検証結果	研究進捗評価結果で見込まれたとおりの研究成果が達成された。
A	<p>本研究は、言語脳機能を解明するために、ろう者と脳腫瘍患者の言語機能の脳活動計測を行い、単語・文法・文章理解の言語過程に対応して左外側前頭葉の背側から腹側に向かって活動が広がることを見だし、音声言語と手話言語に共通した言語メカニズムがあることを明らかにした。さらに、ろう児における日本手話と書記日本語の獲得・評価のための教材を実践的に開発し、外国での教育事情についても研究交流を実施し、ろう者の手話教育現場において重要な啓発活動を進めた。</p> <p>これらの成果は、脳高次機能に関する国際的学術誌への質の高い論文発表や教育書籍・ゲームとして出版されたほか、国内外の多くの学会で報告されている。言語脳機能研究の成果は十分であり、ろう者の教育に及ぼす社会的影響も非常に大きい。</p>